

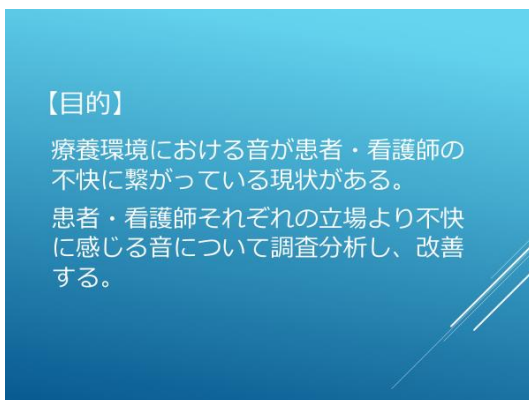
演題 (事務局 記入欄)	療養環境における不快な音の改善 ～患者・看護師の立場より～
	発表者 曾根 恭子 (岐阜県 国民健康保険飛騨市民病院) 共同研究者 今井 晴美、中野 亜李紗、後藤 弘子、岩崎 美幸



期間：令和2年6月～11月

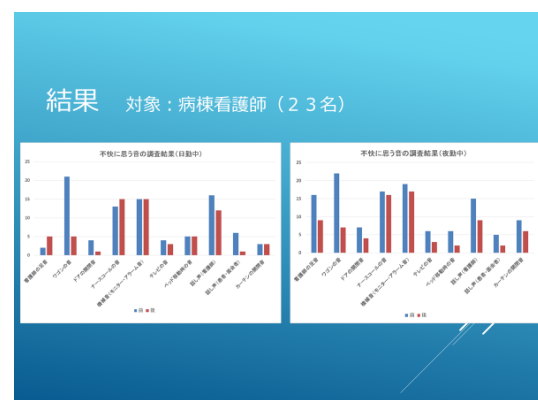
対象者：当病棟入院患者、病棟看護師

方法：令和2年6月、病棟看護師23名を対象にアンケートを実施。令和2年6月～8月、退院が決定した入院患者40名を対象にアンケートを実施。アンケート結果を基に、不快に感じる音を改善。改善後、10月に病棟看護師23名を対象にアンケートを実施。令和2年10月～11月、退院が決定した入院患者40名を対象にアンケートを実施。

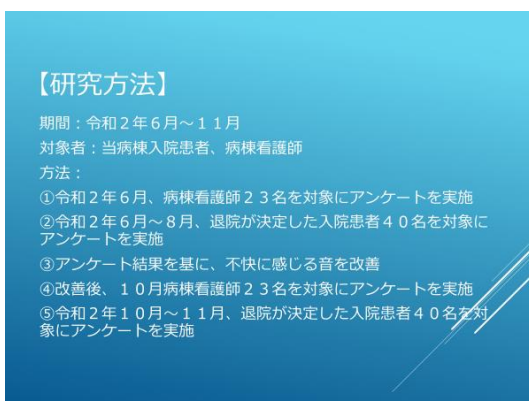


目的

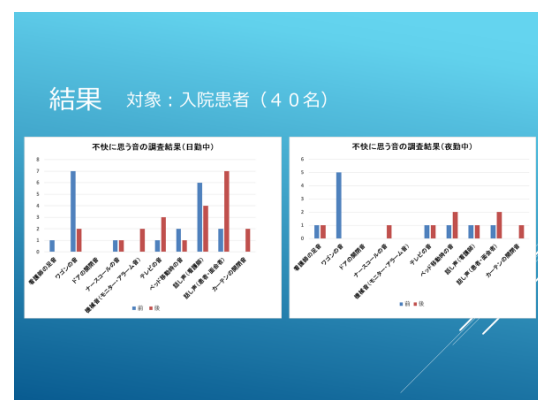
療養環境における音が患者・看護師の不快に繋がっている現状がある。患者・看護師それぞれの立場より不快に感じる音について調査分析し、改善する。



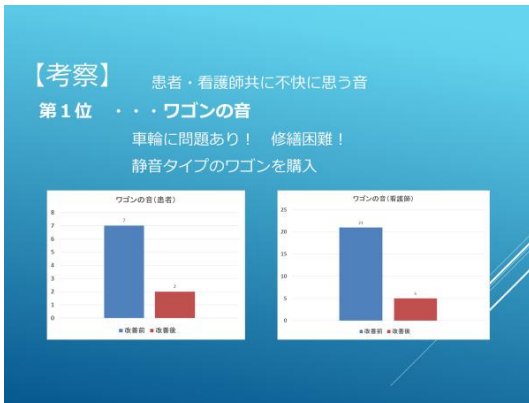
アンケート結果はスライドをご参照ください。



研究方法

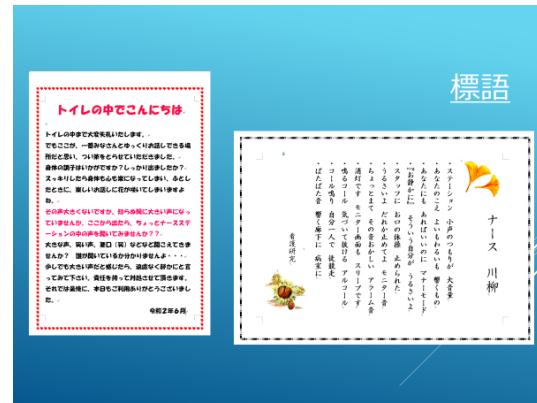


こちらは患者のアンケート結果です。



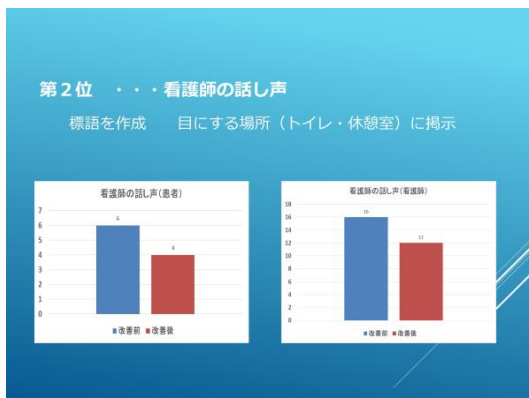
考察

アンケートの結果、患者・看護師ともに不快に感じる音の中で一番多かったのはワゴンの音でした。ワゴンは車輪に問題があり、修繕が難しかったため、新しい静音タイプのワゴンに変更しました。改善前、患者7名（25%）看護師21名（91%）に対し、改善後、患者2名（6%）看護師5名（22%）と減少を認めました。この結果から、不快を減らすことに繋がったと考えます。



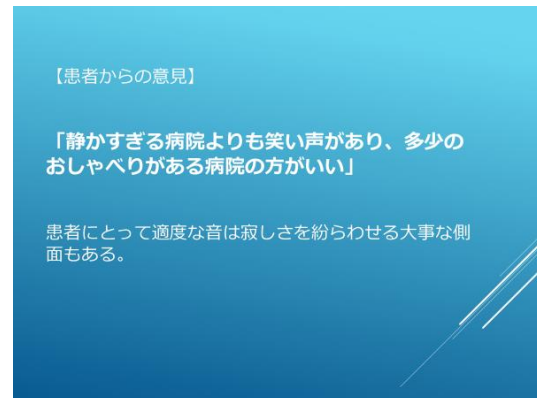
標語は、目にしやすい場所に掲示することで、看護師の行動変化や意識付けに繋がったと考えます。こちらが掲示した標語になります。初めに左の標語を掲示し、スタッフの意識が変わったところで右の標語を掲示しました。一部抜粋します。

- ・ステーション 小声のつもりが大音量
- ・あなたの声 よいもわるいも響くもの
- ・ぱたぱた音 響く廊下に 病室に



次に多かったのは看護師の話し声でした。これは標語を作成し、目にする場所（トイレ・休憩室）に掲示して看護師に周知しました。掲示することで、看護師間で声掛けをしている姿も認めました。

その結果、改善前、患者6名（21%）看護師16名（70%）に対し、改善後、患者4名（13%）看護師12名（52%）と減少を認めました。



患者へのアンケートの中には「静かすぎる病院よりも笑い声があり、多少のおしゃべりがある病院のほうがいい」という意見もあり、患者にとって適度な音は、寂しさを紛らわせる大事な側面もあると分かりました。

【結論】

不快に感じる音を改善することで、患者・看護師の不快を減らし療養環境の改善に繋がった。

人的な不快に感じる音に対しては、視覚からアピールすることで、看護師個人の意識付けや行動変容に繋がった。

結論

不快に感じる音を改善することで、患者・看護師の不快を減らし療養環境の改善に繋がった。

人的な不快に感じる音に対しては、視覚からアピールすることで、看護師個人の意識付けや行動変容に繋がった。